

# アグレプト<sup>®</sup>液剤

ストレプトマイシン硫酸塩…………… 25.0%  
 (ストレプトマイシンとして …………… 20.0%)  
 緩衝剤・水等…………… 75.0%

農林水産省登録 第13823号

毒性 普通物 有効年限 3年 包装 100ml × 50本、500ml × 20本、1ℓ × 10本

## ●特長

ストレプトマイシン剤で野菜、果樹などの細菌性病害に優れた効果を発揮します。

## ●適用病害虫名または使用目的と使用方法

作物名	適用病害名 又は使用目的	希釈倍数	使用液量	使用時期	本剤の 使用 回数	使用方法	ストレプトマイシン を含む農薬の 総使用回数
もも	せん孔細菌病	1,000～ 2,000倍	200～ 700ℓ/10a	収穫60日前 まで	2回以内	散布	2回以内
はくさい	軟腐病			収穫14日前 まで	3回以内		3回以内
たまねぎ		1,000倍	100～ 300ℓ/10a	収穫7日前 まで	5回以内		5回以内
こんにゃく			腐敗病	収穫30日前 まで	6回以内		6回以内 (種いもへの 処理は1回以内)
キャベツ	黒腐病	2,000倍	—	収穫14日前 まで	2回以内		2回以内
キウイフルーツ	かいよう病	1,000倍 (200ppm)	—	収穫後から 落葉前まで	1回	樹幹注入	4回以内 (樹幹注入は 1回以内)

ばれいしょ	軟腐病	1,000～ 2,000倍	100～ 300ℓ/10a	収穫7日前 まで	5回以内	散布	5回以内 (種いもへの 処理は1回以内)
	そうか病	10倍	200～300ml /種いも100kg	植付前	1回	種いも散布	
		100倍	—			5～10秒間 種いも浸漬	
		60～ 100倍	2.5～3ℓ /種いも100kg			種いも散布	
	黒あし病	10倍	300ml /種いも100kg	植付前	1回	種いも散布	
		100倍	—			5～10秒間 種いも浸漬	
3ℓ /種いも100kg			種いも散布				
ぶどう	無種子化	1,000倍 (200ppm)	200～ 700ℓ/10a	満開予定日 の14日前～ 開花始期	1回	散布	1回
			30～ 100ℓ/10a			花房散布	
			—	満開予定日 の14日前～ 満開期		花房浸漬	
						花房浸漬 (第1回目 ジベレリン 処理と併用)	

(平成27年10月31日現在の登録内容)

## ●効果・薬害等の注意

### (1) 一般的注意事項

- 石灰硫黄合剤、ボルドー液及び石灰、タルク、ベントナイトなどの吸着性増量剤を含有する薬剤との混用はさける。
- 収穫物には使用しない。
- 医薬として用いない。

### (2) 殺菌剤として散布して使用する場合

- 本剤の散布によりクロロシス(黄化現象)が生じることがあるので注意すること。特にはくさい、キャベツについては以下の事項について厳守すること。

イ. はくさいについては高温時又は幼苗期の連続散布はさけること。

ロ. キャベツについては高温時の連続散布はさけること。

- 過度の連用をさけ、作用性の異なる薬剤と輪番使用をする(耐性菌出現回避)。

### (3) キウイフルーツのかいよう病に対して樹幹注入する場合

- 本法による防除を初めて実施する場合は、必ず病害虫防除所等関係機関の指導を受ける。
- 主幹が棚下で分岐している樹では効果が不安定であり、また、激しい薬害を生じるので使用をさける。なお、1本仕立ての主幹の樹であっても薬害を生じる場合がある。
- 主幹の途中から分岐している小枝は夏季せん定時に切除しておく。
- 使用量は棚上の樹冠面積 $10\text{m}^2$ に対し $3\ell$ の注入量を基本に樹冠面積が $10\text{m}^2$ 増すごとに $1\ell$ の割合で注入量を増加する。
- 処理方法

イ. 主幹の地際から高さ $10\sim 30\text{cm}$ 程度の部位に、ドリルを用いて直径 $5\text{mm}$ の注入孔を水平にあける。孔は幹の中心部を貫通させ、深さはなるべく反対側の皮層部の際までとする。

ロ. 孔内の木屑をかきだして除き、注入孔の入口をゴム栓で密封する。

ハ. 本剤の所定量を注入器具セットの薬液容器に入れ、棚面に吊し、薬液容器の下部にあるゴム栓に通気針を刺す。

ニ. 薬液が細管の先端に連結している注射針の先に達したら、細管内の気泡を抜き、幹の注入孔を封じているゴム栓に針を刺し込む。針はゴム栓の下方から上方へ上向きに刺し、細管の針に連結する部分をやや弛ませて気泡が抜けやすくする。

ホ. 薬液の注入に要する時間は、通常 $2\ell$ 当たり2時間30分前後である。但し、夕方になると急速に薬液を吸入する力が低下するので、早朝から処理を開始し、その日の内に所定量の薬液を吸引させる。

ヘ. 注入が終了したら器具は回収する。

ト. 注入孔を密封しているゴム栓は梅雨明け後にはずす。できれば塗布剤を塗りカルスの発達を促して注入孔をふさぐ。

チ. 新たな感染などにより再処理が必要な場合には、前年の注入孔をさけ、高さや位置を変える。

### (4) ばれいしょの種いも消毒に使用する場合

- ①萌芽後や種いも切断後の処理は薬害を生ずるのでさけ、必ず萌芽前に

種いもを切断せずに処理する。特に植付後の地温の上昇が遅れた場合には萌芽や生育遅延が助長されるので春先の気温が低い地域では注意する。

- ②浸漬処理が長くなったり、高濃度液に浸漬すると葉害が生じやすいので所定の浸漬時間及び希釈倍数を厳守する。
- ③散布の場合は、種いもを床等に十分に広げ、種いも全体が均一にぬれるようにていねいに散布すること。
- ④10倍希釈で散布する場合には少量散布に適したノズルを使用し、薬液が種いもに均一に付着するようにていねいに散布すること。
- ⑤薬剤処理した種いもは長時間ぬれたままにしておくとう芽遅延等の葉害を生ずるので、風通しのよい場所ですみやかに乾燥させる。
- ⑥種いもを切断する場合は処理した薬液が十分乾いてから行う。
- ⑦薬剤処理した種いもは食料又は飼料には使用しない。

#### (5)ぶどう(ジベレリン液に添加)に使用する場合

- 第1回目ジベレリン処理時にジベレリン液に添加して花房浸漬処理し、第2回目ジベレリン処理(単用)を必ず行う。
- 展着剤は加用しない。
- 薬剤は使用の都度調製し、なるべく調製当日に使用する。また調製液はなるべく日陰におく。
- 必ず処理適期に使用し、所定濃度を厳守する。
- 使用に当たっては、ジベレリンの使用上の注意事項を厳守する。
- 使用に当たっては、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

(6)新品種に本剤を初めて使用する場合は、使用者の責任において事前に薬効・葉害の有無を十分確認してから使用する。なお、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。